

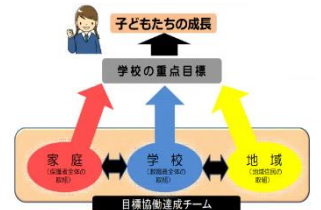
I 学期学校訪問から学んだこと④

【観点Ⅳ】家庭・地域の主体的な取組に向けた熟議の推進

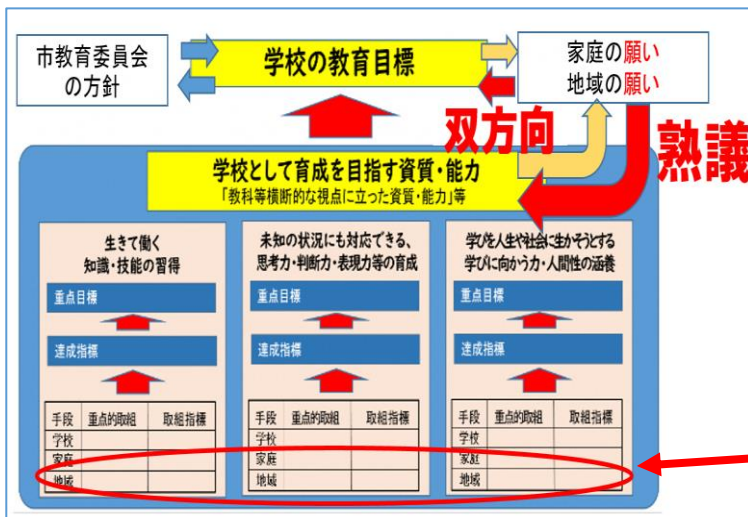
学校運営協議会を目標協働達成に向けたチームとして機能させること。具体的には、学校運営協議会内に必要に応じて重点目標毎の推進部会を設置し、共通の目標達成に向けて、家庭・地域の役割を明確にして取り組むこと。その際、児童生徒の現状・課題、学校の教育目標や「学校評価の4点セット」等の取組内容に関する熟議を行うこと。

『芯の通った学校組織』推進プラン第3ステージ中間年に向けた取組方針について（依頼）令和3年3月5日付 教委教改第1442号

訪問させて頂いた多くの学校では、コロナ禍にあっても、CS委員さんやPTA役員さんの家庭を訪問して学校の重点目標等を説明したり、HPや学校通信で積極的に発信したりする等の地道な努力を行うことで「地域とともにある学校づくり」に取り組んでいました。また、臼杵市立野津小では、PTAが「学校として育成を目指す資質・能力」を子どもにつけるために、PTAの3部会がその事を意識した各活動を設定し、それぞれが協力、連携して取り組んでいます。



「共通の目標達成」～当事者意識をもつためには【双方向】【熟議】～



「朝の交通指導をお願いします」「宿題はご家庭で点検してコメントを書いてください」等の【学校→家庭・地域】は、これまでも積極的に行われてきました。

しかし、(私自身の反省から)何をして欲しいという「手段」については依頼したものの、「どのような力(資質・能力)をつけてほしい」という「目的」については十分伝えていませんでした。また、その「資質・能力」も教職員だけで考えたもので、保護者や地域からの「子どもにこのような力を付けて欲しい」「地域の現状と課題について考えてほしい」というような、【家庭・地域→学校】ではありませんでした。そのため、家庭・地域の「重点的取組」や「取組指標」は学校からの「お願い」となり、「やらされ感」があったように思われます。

目標協働達成に向けたチームとなるためには、地域、保護者、教職員が「子ども達につけたい力(資質・能力)」について「熟議」をすることを通して、「学校として育成を目指す資質・能力」の合意形成を図ることが効果的です。そのような熟議を繰り返すことにより「共通の上位目標」が明確になり、それぞれが「何のために」取り組んでいるのかを理解しあうことで、協働的な実践へと繋がることでしょ。

「大人の本気」「本気の大人」を子どもにみせよう

昨年度、私が住んでいる中津市では「家庭のことは保護者が本気で考えよう！」と、中津市PTA連合会が中心となって「家庭教育のススメ」を作成しました。その際、市教委社会教育課と教育実践家の菊池省三先生の協力を得て、年間4回、毎回3時間「熟議」を行いました。



熟議のテーマは「スマホやネットの使い方」

「宿題や家庭学習のさせ方」「お手伝い」「家族の対話」・・・等、保護者が一番悩んでいることなので、毎回熱心にかつ笑顔にあふれていました。

当初は「親の言うことは聞かないから学校で決めて欲しい」という意見もありましたが、それぞれの家庭の考え方や状況が異なるので、学校が家庭でのルールを一律に決めることはあまり意味が無いことに気がつきました。そして、どのテーマにも共通して大切なことは「家族のコミュニケーション」であり、子どもとの対話のあり方が熟議の中心となりました。

保護者の成功例や失敗談は説得力があり実践的で、今年度はこの「ススメ」を周知するため、ZOOMを使って熟議をしているようです。

保護者や地域の方をいかに本気にさせるか！コロナ禍においてどのようにして対話をすすめるか。皆様のアイデアや実践例をご紹介します。

